
さむらいそうる

春夏琉華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さむらいそうる

【Nコード】

N7136H

【作者名】

春夏琉華

【あらすじ】

私はストーカーに悩まされている。しかも、そのストーカーの正体はちゃんまげを結って、甲冑を着て、帯刀している、あの、侍なのだ。

最近、ストーカーに悩まされている。

ストーカーなのか、ストーカーでないのかよくわからない。
ひょっとしたらストーカーかもしれないけれど、もしかしたら違
うのかもしれない。

もうわけがわからない。

家の外にある電柱の陰に、そいつはいる。

電柱が思ったよりも細かったのか、正体が丸見えだ。
特に刀。

刀が電柱からはみ出しているのだ。

時々、自転車で走ってくる人に迷惑がられている。

スポークにはさまったりしたら大変だろうに。

そう。

ストーカーの正体はサムライなのだ。

チョンマゲ結ってて、甲冑身につけて、帯刀してるサムライ。

きつと、語尾に「ござる」っていうのがつくんじゃないかっての
は私の予想。

サムライは四六時中私の後をつけてきている。ウザいったらない。
甲冑がガチャガチャいうし、たまに馬にまたがってるし。甲冑が
重いなら無理してストーキングしなきゃいいのに。

そうそう。この前、騎乗したまま山手線乗ろうとしてたっけ。さ
すがに駅員に止められていた。ざまあみろ。

そう思ってたなら、馬で山手線と併走していた。どれだけしつこ
いんだ。馬も大変だなあ。ムチャな速度で走ってるし。

死にものぐるいの馬の顔を見て、隣で立ってた小学生が泣きそうになってた。

サムライのストーキングが始まったのは春先のことだ。

あときはアパートの2階にある私の部屋を直接覗き込んでいた。家に帰ってきた瞬間、窓の外にチョンマゲが生えている光景は忘れることができない。本人は隠れているつもりだったのだろう。

すぐに警察に通報してやった。

近所の交番勤務のお巡りさんは5分もしないうちにやってきて、サムライを取り押さえた。

そこから職務質問。

窓ごしにその一部始終を見ていた。サムライがお巡りさんと二言、三言交わすとお巡りさんはどこかに走っていった。

……すっごく嫌な予感がする。

私の家のインターホンが鳴った。扉を開けると、案の定お巡りさんだ。

お巡りさん、少し戸惑いながら、

「えっと、彼、チョンマゲが少し長いだけで、普通のサムライみたいですよ」

そんなん見ればわかる。ていうか、普通のサムライって何だ。普通じゃないサムライはどこにいるんだ。

私がそう訊くと、

「いやあ、普通じゃないサムライってのはあれですよ。暴れん坊將軍とか」

何、普通のサムライってのはあれかい。足軽とかその類のサムライで、普通じゃないサムライってのは將軍とか偉いサムライってことですかい。

「一応、自分の方から注意はしましたんで、もう窓から覗かれるこ

とは思いませんよ」

えっへん、と言わんばかりに胸を張ったお巡りさんは帰っていった。

少し経ってから外を見ると、電柱の影にサムライが立っていた。チラチラとこちらを見ている。

確かに窓から覗くことはなくなっただろうが、事態が改善されていないのはどういう見だ。

それから、半年くらい後。

唐突に、サムライから恋文が送られてきた。

扉を開けた瞬間、ヒュツと風を切る音がして私の背後の壁に矢が突き刺さったのだ。さすがに矢文は止めてほしい。これでは、ストーカーなのかヒットマンなのか判別に苦しむ。

矢を壁から抜いて電柱の方を見ると、馬にまたがってこちらを見上げていた。もう隠れる気無くなったのだろうか。通行人にもしっかり会釈してるし。

草書で書かれた文面は解読不能だった。せめて楷書で書いてほしかった。達筆なのは認めるが、想いが全く伝わらない。

ギリギリそれが恋文だとわかったのは、最後にハートマークが描かれていたからである。

しかし、筆でハートマーク書いたやつは初めて見た。草書の文面とハートマークのギャップがひどい。

取り敢えず、その日を境に私が朝出かけようとする度に矢文が飛んでくるようになった。

いつも同じ角度で射ってくることは評価しよう。だが、穴だらけの壁はどうする気だ。

敷金払うのは私だコンチキショー。

今度、弓道部の友だちに頼んで弓の使い方を教えてもらおうと思う。

雪が降った。

こういう日はさすがにサムライもいないだろう。まさかなあ、と思いつながら私は外に出た。

サムライはいた。

いつもの電柱の影。

頭の上に雪が積もっていて、唇は紫色だ。カタカタと体が小刻みに震えている。

私は傘を手に、サムライのところに駆けていった。

サムライは私のこともわからないのか虚ろな瞳でこちらを見てきた。かなり衰弱してるみたいだ。

まったく、いつから立ってるんだ。昨日の夜から雪降ってたじゃないか。

私は家の中にサムライを引っ張り込むと、甲冑を脱がして、毛布をかぶせ、インスタントのココアを渡した。

しばらくサムライは無口だった。私はココアに口をつけるサムライをじっと見つめた。

「甘くて、美味であるな」

サムライがボソツと呟いた。意外に渋くて低い声にドキリとしてしまう。

「何で私のことずっと見てたのよ」

そう訊くと、

「そなたに危機が迫っていたのだ。某、危機が迫っている人を見つければ、助けるのが使命なのだ。それ故、そなたを監視していた」

「まったく、迷惑な使命ね。それで、何で矢文とかそういうことす

るの？」

「そなたを監視するうち、愛おしくなってしまったのだ。そなた、隣国の姫君によく似ている」

「隣国の姫君がわかんないけどね。まあ、いいでしょ。取り敢えず、目的はわかったわ。私のこと、守ろうとしてんでしょ？」

サムライは静かに頷く。

「ありがとね。でも、好きにはなれない。だって、あなたサムライじゃない。サムライって今のご時世流行らない職業だし、きっとあなたは次の使命を見つけてしまうでしょ？」

サムライは言い返してこなかった。

代わりに、サムライはココアの入ったコップを床に置いた。そして、立ち上がる。

「隣国の姫君にも、そう言われた」

その背中には寂しさがにじんでいる。こんな平成の世の中で一人、サムライをやってるなんて。

サムライは甲冑を身につけて、振り向いた。

「もうしばらくはそなたの周囲を監視すると思うが、気を悪くしないでください。それでは、御免」

サムライが部屋から出ていくと、無性に寂しくなった。追いかけていって背中に抱きついたら正解なのかも考えた。でも、そんなことしたら彼は戸惑うだろう。

せめて、この雪の降っている間はここに引き留めておけばよかった、と私は初めて後悔した。

夜、物音がして目が覚めた。押し入れ辺りからだ。

少し前の私だったらサムライを疑ったが、今は違う。
じゃあ、何だと言うのだろう。そこにいるのは誰？

静かに布団を抜け出すと、押し入れの前に立つ。そして、一気に、押し入れを開けた。

「ふふん、そちらではござらんよ」

振り向くと、机の引き出しから影が伸びていた。

構図的にはタイムマシンから出てきた猫型ロボットみたいな感じだが、シルエットが違う。何っ？か、ほんわかっぱな感じが足りない。

何者だろう。私が思った瞬間、

「我は忍者でござる」

あ、忍者って名乗るんだ。ニュータイプだな、こりゃ。全然忍んでない。

「今時の忍者はイケイケでアゲアゲでござる」

何言ってるんだ、この忍者。すっかり語尾が「ござる」なところがムカつく。

「気づいてなかったかもしれないが、我が君のストーカーでござる」
いきなりのカミングアウトに私は絶句する。

「てか、気づかれてたら忍失格じゃん」

「うるさいうるさい、でござる。とにかく、我のことに気づかずにサムライにデレデレしやがって、さすがの我も堪忍袋の緒が限界でござる――」

えー、よくわからん。わからんけど、忍者が懷から取り出したのはクナイだった。鋭い切っ先がこちらを向く。

「君を殺して我も死ぬでござる」

語尾のせいで緊張感が無い。でも、忍者の目はマジだった。ヤバい、本当に死ぬかも。

投げられたクナイが床に刺さる。私は横に倒れ込んで、何とか避けた。でも、膝を強く打ちつけてすぐに立つことができない。

忍者は2本目のクナイを用意して私に迫ってくる。忍者なら忍法

使えってんだ。地味に血を流しながら死ぬなんてごめんだし。ていうか、こんな変態忍者に殺されたくない。

「へへへ、年貢の納め時でござるな」

年貢つつうか国民年金も払ってないや。罰があたったのかなあ。

クナイがゆっくりと迫ってくる。

あ、死ぬかも。

そのとき、確かに見た。

窓の外。

耳をつんざく音がして、忍者が吹っ飛んでいった。

サムライが、外から飛び込んできたのだ。

サムライは刀を構えて、忍者を牽制する。忍者は遠い間合いから飛び込んでいった。

「私の恋路を邪魔するやつは許さんでござる！！」

サムライの刀が一閃した。

忍者が膝をつき、うめき声を漏らしている。

「某の使命は終わった」

刀を収めて忍者を肩に担ぎながら、サムライはそう言った。

「次の使命が待っている故、行かねばならん」

精悍な横顔。私はその横顔を網膜に焼き付けていた。

「あなた、立派なサムライね。私、あなたのこと嫌いじゃないわ」

サムライは微笑んだ。

「御免」

サムライは窓から出て行った。馬のいななきが聞こえ、ひづめの音が遠ざかっていく。

一人残された私は、静かに、思う存分、泣いた。

今でも街中で走っている馬を見かけると、サムライのことを思い出す。

たまに電柱の影を覗き込んでしまう私は、少し未練があったのかもしれないな、と自嘲的に笑った。

（完）

（後書き）

この作品も迷ってます。出口が四方向に伸びていつている感じがします。

ご意見、感想などありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136h/>

さむらいそうる

2010年10月8日15時36分発行